

◇2月は何と言っても第67回書道芸術院展関連の仕事。今年は千葉先生から少し仕事を引き継ぎ、徐々に内容が分かるにつれ事業の大きさを感じる。

8日、役員作品が東京都美術館に搬入された。何とこの日の東京は大雪に見舞われた。前の使用団体の搬出が長引き、雪の影響とて思うように進まない。結局搬入開始が午後2時半頃。何とか午後5時半に搬入が終わったが、一部の作品は交通機関が全く動かず、結局翌日の審査にも間に合わなくなるハメになった。

翌9日は朝から大賞選考であった。夜が明けると東京23区は積雪約30cm。交通機関は軒並みマヒ。審査に間に合わない先生もおられたがこれも仕方なく、欠員のまま行われた。本年は財団理事監事の先生方が選考委員。776点の力作が揃い、厳正な審査で各賞が決まっていく。書道芸術院大賞にはかな部・群馬県の松本泰子さんが輝いた。書道芸術院準大賞は5人、白雪紅梅賞は10人。本年から新たに書道芸術院俊英賞が設けられ60余人が輝いた。玄遠社関係では漢字部・大阪府の田口鈴木さんが準大賞、白雪紅梅賞は漢字部・奈良県の衣田琴草さんであった。

10日には審査会員に対する賞の選考が財団理事監事にて行われた。今回より峰

雲賞がなくなり、「書道芸術院春華賞」を新設。483点の中から1点しか選ばれない。本年は漢字部・千葉県の半田藤扇先生が選ばれた。併せて本年の秋季展推薦作家、選抜作家の選考も行われた。

15日の陳列作業も先週に引き続きまた大雪に。やはり30cm近い積雪となり交通機関はマヒ。朝の集合時間に間に合ったお手伝いの方は予定の3分の2、陳列業者は半分くらい。どうなることかと思っただが、午後になり次第に駆けつけてくださった。何とか陳列作業は進み、午後3時からの記者会見は予定通り開催。本年評論家の眼は田宮文平・名児耶明両先生にお願いし11名が選ばれた。同時にこの日は翌日の祝賀会準備。タクシーが思うように手配できず、私の車で事務所・都美・帝国ホテルと一日中都内を駆け回った。

16日は研究会・表彰式・祝賀会。本年は学生展表彰式が同日となり、雪の影響もありてんやわんやであった。欠席者も続出。残念であった。



雪の中500人ほどで祝賀会

◇3月は第67回書道芸術院展の残務というか、次年度に向けての準備のような仕事が結構あった。細かいことでは表彰式や帝国ホテルに搬入した事務用品などの整理をしたり。皆さんにわかりやすいのが書道芸術院展受賞者で昇格される方に通知文書を作って発送するなど、たくさんの仕事がある。

ここで事務局のシステムがいかに素晴らしいものになってきているか実感。事務処理のパソコン化だ。たとえば前述の通知文書発送。千葉蒼玄先生が長年のノウハウの蓄積でつくられたパソコンのシステムでずいぶん楽になっている。他にも、もちろんパソコンを活用して効率的になっている部分が多々。私のような素人でも何となく使えるようになってい。今やパソコンなしでは事務所機能は果たせなくなっている。便利になり非常にありがたいことだ。ただ心配なのはシステムがダウンした時。システム（パソコン）の中身が分からなければ対処のしようがない。アナログでも何とか対処できるようなしておかな



3月14日院理事会の様子
事務の大綱もここで決まる

ればならないのも事実。しかし、書類がたくさん増えて事務処理が煩雑になるようでは時代に逆行している。それだけ間違っても増える。できるだけ簡素化して誰にでもできる部分を作っていくかなければならない。しばらくはデジアナの時代が続くであろう。デジタル化するには、もうパソコンに精通した専門家が必要な時期に来ているのかもしれない。

◇3月27日は竹橋の毎日新聞本社地下にある毎日ホールで、第66回毎日書道展の部長・副部長・主任会議が行われた。私は本年、大字書部の審査部主任を仰せつかった。気を引き締めてかからなければ鑑別・審査が滞る。なんとか先生方のご協力をお願いし、無事乗り切りたいと思う。今回展の実行委員長は船本芳雲先生である。ご挨拶に、昨今の書道界を取り巻く状況をお話しされた。そして、「情報公開の時代だが、中途半端な情報が独り歩きしないように気を付けてください。徹底した書類管理をお願いします。審査は厳正に、良い作品を取り上げてください。展覧会が終わったらみんな笑って楽しい展覧会であったと言えるようにしましょう」と。

みなさん、楽しんで「書」をさせていただきますか？ 作品は正直です。「道」がつくので奥が深く難解な部分がありますが、楽しくないと何事も続きませんよね。

◇4月に入り大個展が開催された。作品は5月号に一部紹介されたとおり「船本芳雲書展―沁みいる故郷―」と題した展覧会である。相前から計画をたてられていたようで、昨年には開催をお聞きしており、楽しみにしていたものだ。会期は4月3日〜8日。



「船本芳雲書展―沁みいる故郷―」

場所は横浜にあるそごう美術館だ。聞くところによると、ここでの大きな書家の個展は初めてのようだ。船本先生とは高野山競書大会の審査で20年ほど前からお世話になり、書のこと、人間修養のこと、書道界のことなど、様々な観点からお話をいただいている。中国にも一緒にこの場では語り尽くせない尊敬する人格者である。

先生は1942年樺太野田郡生まれ。幼少期樺太から家族で命からがら引き揚げられ、石川県能登半島の珠洲郡宝立町（現珠洲市）において高校生まで過ごされた。その後神奈川県で青木香流先生に師事。現在は（一財）毎日書道会理

事・近代詩文書部審査会員、日本詩文書作家協会理事長、（一社）書燈社顧問など、数多くの役職に就かれている。以前から「現代の日本語を使い、自分の言葉で書表現をする」とおっしゃっており、鑑賞者は感銘を受ける。中には目頭を熱くされる方も見受けられた。書は勿論のこと、絵画が添えられているものあり、バラエティーに富む。先生の広さと深さが感じられる展覧会であった。作品の画像はホームページなどでもご覧いただける。是非鑑賞していただきたい。

◇4月23・25の両日、競書誌「書道芸術」の特別昇級昇段試験が実施された。今回から審査にも加わった。皆さんの力作がずらりと並ぶ。しかし師範に昇格するにはなかなか厳しい。まさに試験。全体の4分の1ほどしか上がらない。難関を突破された作品はやはり書き込まれている。雑事に追われ書けなくなることもあるだろうから、書ける時期に徹底的に鍛錬していただきたい。



特別昇級昇段試験審査

◇5月1日は事務所のパソコンシステムに新たなセキュリティシステムを導入するべく、パソコンや競書雑誌「書道芸術」や書道芸術展の審査システムなどでお世話になっていた株式会社リンクスの方に来ていただいた。もちろん既存の導入はしているのだが、より高度なものにするためだ。最近是我々の目に届かないところに変なパソコンウイルスを忍び込ませていくことが多く、素人では対処しきれない部分がある。事務所では膨大な個人情報扱っており、情報が外部に漏れることがあつてはならない。何事も完璧はあり得ないだろうが、少しでも完璧に近い状態で運用したいものだ。そうこうしているとその翌週には、インターネットエクスプローラーの脆弱性が発見され、まるまる一日かけて事務所内のパソコンをすべて一人で対処するというハメになった。現在は大したトラブルもなく運用できている。

◇5月15日は競書雑誌「書道芸術学生版」の昇級昇段試験の審査が行われた。さすがに全国規模の競書雑誌なので出品数が多い。昨年とあまり変わらない数の力作が寄せられた。今回は出品数の集計や昇級数を割り出す一覧表を新たに作成し、少し事務効率が上がったようで、例年よりは若干早く終わった。まだまだ改良の余地があるシステムですがますますの効率化を図っていきたい。

◇5月はいよいよ我々の目にする部分で第66回毎日書道展が動き出した。12〜14日が公募作品の受付搬入。22〜26日に国立美術館で作品搬入・整理・厳正な鑑別が行われ、入選作品が決定した。

折からの不況・震災などで出品数の減少が見込まれたが、その通りの結果になったようだ。しかし依然公募出品数日本一の大展覧会には違いない。書道芸術院は微減だが、昨年と同数と言っても差し支えないものだ。残念ながら玄遠社関係の出品数は減少傾向にある。作品は大きく大変そうに見え、出費もかかるが、このような公募展は目に見えない部分で自分自身の力にもなり、交流範囲も広がる。作品の質向上はもとより、人間修養の場である。未だ出品されていない方は勇気をもつて踏み出してほしいものだ。

玄遠社の先生方は経験が豊富なので、必ず力になつていただけることは間違いなく。



本年の大字書部当番審査員。書道芸術院からは崎井恵風・石田春窓先生

◇6月8日朝、東京大阪の喧噪を抜け出し一路高知県は安芸市に向かった。第32回安芸全国書展が開催され、表彰式・祝賀会にも出席するためだ。

安芸市は、高知市の東約40km。高知市と室戸岬の中間くらいに位置する。市街地は安芸川・伊尾木川の二つの河川が四国山脈から平野を南流して太平洋に注ぐ。そして温暖。農産物ではピーマン、ナス、柚子など、また海産物ではちりめんじゃこが有名。伝統的な産業として粘土瓦や内原野焼きなどがある。安芸市に縁のある人物は、三菱財閥の創始者でもある岩崎弥太郎や、「雀の学校」など数々の童謡を作曲した弘田龍太郎の生誕地。スポーツ界では幕内力士の土佐ノ海・栃煌山、また阪神タイガースのキャンプ地として大阪人にも馴染みがある。

館内には日本書壇を代表する作家の作品展示はもとより、全国書展や、特別企画展も催され、そのほか書道に関する資料や書籍も充実。安芸全国書展は書の殿堂として全国から1、400点を越す作品が応募されて注目を集めている。また「全国書展高校生大会」などの書展が毎年開催されている。

◇6月12日には書道芸術院の理事会が行われた。財団役員が若干入れ替わり新体制のスタートである。詳細は『書道芸術』誌、もしくはホームページをご覧ください。その後、第68回書道芸術院展の運営委員会・実行委員会が行われた。大綱は67回展と同様である。67回展にも増して大変なのが学生展表彰式、院展作品研究会・表彰式・祝賀会、作品撤去が同じ日に行われる。綿密な打ち合わせが必要であろう。皆様のご協力をお願いしたい。



安芸展祝賀会の一コマ

◇この夏は何度も台風が直撃したり前線が居座り各地で大雨を降らしたりと大荒れの模様である。毎年毎日書道展の入賞審査が終わったところから夏本番過ぎしにくい季節の到来だ。

そんな暑いさなか、7月2日、第66回毎日書道展の会員賞選考が行われた。本年は例年の賞数に戻りより一層難関であった。昨年の書道芸術院関係の受賞者は4人。本年は2人である。刻字部・工藤溪舟、前衛書部・知野洛水先生が栄えある賞に輝かれた。翌3日は文部科学大臣賞選考。創玄書道会の室井玄聳先生が受賞された。◇7月中旬は書道芸術院関係の書展が盛りだくさん。文藝春秋画廊では飯田春香・崎井恵風・高田春来・前田龍雲の四人展。アートサロン毎日ではみちのくの書人たち展で青森・岩手・宮城各県の作家が集った。下谷洋子先生率いる書泉会展は銀座清月堂画廊にて。玉松会は黒川江偉子先生の個展コーナーありと、それぞれ特色ある作品が発表された。毎日研修旅行団の同窓展も、大黒屋ギャラリーでは豊峯会、印象社ギャラリーでは楽竹の会などにぎやかに開催された。

とりわけ大きなものは書道芸術院常

務理事の小竹石雲先生が行われた銀座での個展である。地元岡山ではこれまでに数度個展を開催されているが、東京では初めてとのこと。7月14日夕刻、展覧会場での祝賀会をはじめ、会場は連日大賑わい。素晴らしい作品内容に感銘を受けた。会期中には2度のギャラリートークが行われ、15日下谷洋子・辻元大雲先生が、18日には鳥谷弘幸東博副館長、種谷萬城白扇会理事長が小竹先生を囲んで多岐にわたる内容のお話を聞くことができた。



小竹石雲書展にて

◇7月20日は毎日書道展の表彰式・祝賀会であった。本年の書道芸術院関係受賞者数は、会員賞2、毎日賞15、秀作賞32、佳作賞64、U23毎日賞1、U23奨励賞5の成績であった。毎日書道展の祝賀会後、書道芸術院主催の祝賀会を芝パークホテルにて開催。本年も司会進行の大役を仰せつかった。U23受賞者の紹介を前半にもつてきてスポットライトを浴びてもらった。大勢の参加者で盛況であった。

◇8月20・21日と書道芸術院秋季展の審査会員候補公募作品整理が書道芸術院の事務所で行われた。27日には東京文具会館にて審査が行われた。今回の応募点数は370点218人。昨年より5%増加である。特に前衛書部が増加。現代詩文書部がほぼ半減した。この中から、厳正な審査の上、秋季菊花賞6点(昨年比マイナス4点)。秋季俊英賞44点が選ばれた。最近特に誤字チェックが厳しい。漢字部・現代詩文書部出品者は要注意。しかし難関である。そして昨年より、公益財団法人化に伴い秋季俊英賞も昇格の点数に加えられる。玄遠社関係は漢字部・堀田白扇さんがみごと菊花賞に輝いた。俊英賞には漢字部・旭箏陽、河岡北秀、木村澄春、田中喜美枝、椽尾箏興さん。9月30日、秋季展初日に表彰される。展覧会場は紙バルブ会館5階に移転したセントラルミュージアム銀座。表彰式は紙バルブ会館2階銀座フェニックスプラザである。本年は玄遠社書展と同じ会期であるが、時間を作ってお出かけいただきたい。

◇書道芸術院の恒例行事、単位認定講習会が8月23・24日の日程で行われた。本年の担当は関西総局。場所は和歌山県高野山。ここでの開催は40年ぶりと聞く。漢字・かな・現代詩文・篆

刻刻字(本年は篆刻)・前衛・原拓書道史・書道芸術院史、書写教育の講義、そして今回は特別に、添田隆昭高野山金剛峯寺宗務総長による講話と充実した内容。受講生・役員あわせて220名以上の参加で会場の高野山大学体育館は溢れかえった。これほどの人数を1カ所で収容できる宿泊施設はなく、4カ所に分宿となるなど準備がたいへんであったことは想像に難くない。東京の書道芸術院事務所でも資料や封筒の印刷、入金管理など、参加人数相応の仕事量であった。東京は猛暑であったが、高野山は標高900〜1,000メートルで下界より数度低い気温。若干湿度はあるが涼しかった。クーラーのない講習会場であったが快適に過ごすことができたのではなからうか。受講生は過密スケジュールで清々しさを感ずる余裕はなかったかもしれない。来年は東北総局(後藤大峰総局長)が担当。秋保温泉の予定と聞いている。



熱心な指導を受ける受講生

◇9月は月例競書雑誌「書道芸術」の昇級昇段試験関連の仕事があった。まずは各支部への書類発送が1日に行われた。これは事務所の職員さんに毎年お願いしているようだ。支部がたくさんあるので骨が折れる。15日の締め切り、送られてきた作品をまとめ、19日に開封、作品の整理。これは近隣にお住いの先生方の協力を得てなされる。作品の種類も受験者数も多いのでたくさんの人手を要し、丸々一日かけてするのだが、若干今回は受験数が少なかったようだ。24日は財団幹部の先生方にお集まりいただき3種の審査が事務所内で行われた。厳しい師範昇格の厳格な審査もこのときである。26日には1種・2種の審査であった。

他には書道芸術院展のシステム打ち合わせや、秋季展の東洋額装との打ち合わせなどなど、枚挙に暇がない。

◇9月10日〜23日まで、東京・北千住のシアター1010ギャラリーで「カナシキシンボウ展 ANVIL」が行われ伺ってきた。金敷駿房さんは1973年、東京生まれ。石飛博

光先生に師事。毎日書道展審査委員会。5年ぶりの個展だそう。「ANVIL」とは英語で「金敷」を意味する言葉。金敷さんの父上が鉄工所をさしているとのことで、「物心ついたときから、私のそばには鉄があった。さまざまな種類の鉄、アブラの匂い、錆の色……」とパンフレットにある。ゆえに斬新な書と鉄で作られたコラボ作品が多数出品されていたのが印象的であった。7枚の鉄板を屏風に仕立てた「熊」(表面)と「一所懸命」(裏面)。谷崎潤一郎の言葉を鉄のジャンブルジムのようなものにちりばめた「陰翳礼讃」や「龍の嵐」(5メートル×12・4メートル)、「風の翼」(5メートル×5・8メートル)など、大作が並んでいた。脇には工夫された小作品がずらりとともこの紙面では紹介しきれない個展であった。



カナシキシンボウ展

◇10月は月例競書雑誌「書道芸術学生版」の昇級昇段試験関連の仕事があった。以前は大人対象の「書道芸術」の昇段試験も同時期に行われていたようだが、昨年からは1か月ずらして行うようにして指導者の先生方と事務所の負担を分散するようにした。10日が締め切り、作品の整理。丸々一日かけてするのだが、受験数が多く大変である。審査は15日、事務所内で行われた。

どこの団体もそうだろうが、いかに出品数を減らさないようにするか工夫をしている。まずは雑誌の手本はよくないといけないと話に出ている。学生が学ぶものなので、基本に忠実、かつ独自性も兼ね備えないといけないのである。これはなかなか難題である。

事務所では月末に翌月の打ち合わせをしている。それぞれに皆さまさまざまな仕事と家族を抱えながら生きている。全員が一週間そろって事務所に出ることがなかなかできないので調整をして何とか回し



事務所での打ち合わせ

ているのが現状だ。打ち合わせがうまくいかないと思慮をきたす。バランスを崩さないようにしなければならぬと感じる今日この頃だ。

◇10月31日～11月3日まで、東京・池袋の東京芸術劇場5階展示ギャラリーで「金子大蔵書展」が行われ伺ってきた。金子大蔵さんは1973年、東京生まれ。金子卓義先生に師事。毎日書道展審査員。まず会場に入って迎えてくれた作品は超大作。タテ約5メートル×ヨコ約20メートルである。高村光太郎の有名な「道程」の一節である。最近はこれくらいの大作を目にする機会が増えたように思う。いろんな意味で大変だが、一度大きなものに取り組むと小さい作品を書くのが楽になる。皆さんもまず「玄遠」の条幅部に出品。そして毎日書道展や書道芸術院展にチャレンジしてみたいかがだろうか。



金子大蔵展